告知と宣告の巻　その２

　前回に引き続き、今度は「宣告」という言葉について考えてみましょう。穏やかではありませんね。だって一般に「宣告」という言葉は「死刑」とセットでしか利用法がないですから。そんな穏やかでない言葉にもかかわらず、病院で患者さんの「余命」が話されると決まって「余命宣告された」という言い方が使われます。

　これだけでも世間一般では、「余命」という言葉が死刑と同じ括りで理解されているのだと明白にわかります。どうやら、「余命宣告」という表現は、二つの誤解に基づいて用いられていると思います。まず、ひとの余命は裁判の判決とは異なり、決められた予定ではありません。余命は見込み、あるいは予想です。医者の言う余命が必ず当たるならば、余命宣告＝死刑宣告のイメージにも納得がいきますが、けっこう外すのが常です。私たちの業界には「予後予測」という用語はありますが、これさえあれば余命がわかる、というツールは未だに存在しません。

　第二に、余命を「宣告」するという表現は、テレビや小説でしばしば見かけます。しかし現場の医者が、余命を「宣告」したと自分から言ったり書いたりしたものを、私は見た記憶がありません。つまり余命を語る側の医者は、自分が患者さんの余命をあらかじめ知っていて、それを断定的に「宣告」したなどとは夢にも思っていないわけです。むしろ、人生の終わりはいつかそのうちだと思っていた人に向かって、「案外そうでもなさそうですよ、有限ですよ」と気付いてほしい気持ちでお話をしています。ましてや日時の約束では断じてない。ところがです。それを聞いた患者さんや家族は全く違うメッセージとして受け取るようです。それこそが、自分の残り時間を言い渡された＝自分の予定を他人から一方的に宣言された＝「宣告」された、という感覚ではないでしょうか。その感覚はまさしく受難というにふさわしい、被害者感情だと思います。

　ふだん患者さんと話していると、医者というものは、目の前のひとの寿命を知っていて当然、という暗黙の常識みたいなものを感じる時があります。「いやいやそんな訳ないでしょう。未来予知なんて学校で習ってないですよ。」などと軽く返そうものなら、却って冷ややかな視線を感じることさえあります。医者が予想した余命は、それを口にした瞬間に、聞いた人の頭の中で確定した予定として機能し、その日付へ向けてのカウントダウンが始まってしまうようです。だからこそ、余命について言及することには慎重であらねばならないと思うわけです。ひとたび予定として信じ込んだ人に向かって、あとから「あれはあくまでも予測です」なんて言っても通じませんから。

　そんなわけで、「余命宣告」という言葉は、余命を言う側ではなく、言われた側の理解に基

づく表現に違いないという話でした。それにしてもですよ。私も含めた現代人の特徴かもしれませんが、予定が逐一叶うのが当たり前だと思っているフシ、ありませんか？今まで自分の人生を予定通りに生きてきた人、います？それで未来も予定通りに？な・い・な・い。期待しすぎず予定に囚われず、おおらかに生きていたいものですな。